

重度要介護高齢者の姿勢および生活展開と睡眠 一覚醒リズムの関係性について

日本建築学会計画系論文集/ No. 608/ pp. 27-34/ 2006年10月

正会員 山口 健太郎 君

特別養護老人ホームの計画条件について重度要介護高齢者の立場から明らかにした研究である。高齢者の身体活動を測定するためにアクチグラフと呼ばれる小型加速度計を用いた点に工夫があり、ベッド、畳、車椅子等における臥位、平座位、椅座位の姿勢が、睡眠一覚醒のリズムにどのような影響を与えているかを分析している。その結果、椅座位の背もたれ 90 度で身体活動数があがること、離床時間が約 3 時間半以下では昼夜逆転し好ましくないことなどを発見し、介護方法等に有効な知見を得ている。なお、このような成果は看護学等としては評価できるが建築学との関わりが弱いという課題がある。

本論文の優れている点は、最終章において、既報の研究成果とあわせて、介護単位の小規模化と食堂分散型配置の良さ、畳スペースの臥位姿勢への貢献など、建築計画への示唆を整理したことである。調査分析から計画への展開が明快で、奨励賞に相応しいと評価できる。